日本史　創価大学一般入試 B･C 学習アドバイス（傾向と対策）

■一般入試 B（2 月 3 日）

出題傾向

大問 4 題、総解答数 40 問、解答形式は全て 4 択のマークシート方式が採用されている。解答時間は 60 分。問題構成は以下の通り。

1 古代から近世の政治・外交・文化史の雑題
2 近世（織豊政権・江戸時代）の政治・経済・文化史
3 近現代（明治～戦後）の外交に関する会話及び史料問題
4 高度経済成長期の政治・経済・文化史

問題の難易度は、標準レベル。総解答数 40 問のうち、正誤文判定問題が 15 問（前年より 4 問増加に加えて 3 問は正文の個数を選択する問題）、組み合わせ問題が 5 問、年代順並び替え問題が 3 問。他は事件、人物等の用語の知識を問う問題だが、「不適切なもの」を選ぶ問題と「最も適切なもの」を選ぶ問題が入り混じっているので一問一問、設問条件を確認しながら解く必要がある。史料は 3 の中で 3 つ出題されている。出題範囲は、主に古代から戦後までで、戦後史に関する出題は 12 問（前年より 9 問増加）であった。出題内容は、政治史・外交史・社会経済史・文化史というバランスの取れた出題である。社会経済史の出題は全部で 11 問、文化史の出題は全部で 10 問と、出題は増加傾向にある。

学習アドバイス

設問の中で一番多い、人名や出来事名を問う問題については基本的な語句が多く、教科書の太字の語句について、しっかりと整理し、市販の一問一答集などを利用して、即答できるように練習を積むことが必要である。5 問出題された組み合わせ問題のうち 2 問は文化史からの出題で、いずれも作品名と作者名の組み合わせを選ぶものであった。教科書で太字の作品名については即座にその作者名が出てくるようにトレーニングを積んでほしい。3 問出題された年代並び替え問題のうち 2 問はそれぞれ「織豊政権の出来事」、「江戸初期の政治・外交」がテーマである。前者はまず信長の時代の出来事と秀吉の時代の出来事に分けて整理する。後者は政治史と外交史に分けて整理すると解きやすい。3 は幕末から戦後までの日米関係の年表と生徒の会話文の下線部に関する正誤問題が 10 問出題された。「ペリー来航から不平等条約締結までの日米関係」についてはなぜアメリカが日本に接近したかの背景を、「日露戦争後の日米関係」「満州事変以降太平洋戦争までの日米関係」については、日本のどのような行動がアメリカの日本への警戒心を高め、日米関係悪化につながったかの背景を、そして「第二次世界大戦後のアメリカの対日占領政策」については、当初の占領政策から逆コース化に転換していく背景を、教科書をしっかり読んで理解しておかなければならない。内容的に細かい選択肢もあったが、消去法をうまく活用して解いてほしい。このような正誤問題に強くなるためには、従来のセンター試験の過去問など正誤判定形式の問題を数多く解いていくことで、選択肢の吟味もスムーズに行なえるようになる。誤文についても、「どこがダメなのか」を一つ一つ根拠を考えながら練習していくことで、正答率は高まるはずである。その際に、「人名」「事件名」は合っているかなど、注目すべき点をしっかりとチェックしてほしい。4 の最後で 3 問出題された設問の設定時期についての正文の個数を選択する問題は、選択肢の吟味だけでなく「時期」が合っているかどうかのチェックが必要で難度は上がるが、特に戦後史の学習をする際に、「1950 年代」「1960 年代」「1970 年代」「1980 年代」という感じで大まかな時期区分をして、その時期に起こった出来事をノートにまとめるなどしてほしい。

全部で 10 問出題された文化史については暗記要素が強い分野であるが、2 の問 6 の「元禄文

化の特徴」を問う問題に対応するためには、やみくもに知識をインプットする前に、各文化の特徴を 2～3 行で説明できる状態に体系化する学習を普段から心がける必要がある。さらに文化史の学習をする際に、政治史・外交史と関連付けながら学習すると効果的である。

■一般入試 C（2 月 7 日）

出題傾向

大問 4 題、総解答数 40 問、解答形式は全て 4 択のマークシート方式が採用されている。解答時間は 60 分。問題構成は以下の通り。

1 原始・古代の政治・外交・文化に関する雑題

2 中世・近世初期の史料問題

3 江戸時代の政治・社会

4 大正から戦後の大衆文化

問題の難易度は、標準レベル。総解答数のうち、正誤文判定問題が 9 問（そのうち 1 問は史料の内容を問うもの）、組み合わせ問題が 3 問、年代順並び替え問題が 1 問で、他は事件、人物、作品等の用語の知識を問う問題。史料問題は 2 で鎌倉時代の重要法令や戦国時代の分国法の史料が複数出題された。出題範囲は、主に古代から戦後までで、戦後史に関する出題は 2 問であった。出題内容は政治史、文化史、社会・経済史からの出題で全体的にバランスが取れているが、文化史の出題が 12 問で、前年に引き続いて割合は高い。

学習アドバイス

全部で 9 問出題された正誤文判定問題では「正文」ではなく「誤文」を探すようにする。その際に、一つ一つの文章に目を通し、用語を確認して、その際に次の 3 点を順にチェックする。(1)「時期」の不適合。「設問での時期設定と異なる時期の用語が含まれる」または「用語同士の時期にずれがある」(2)「用語同士の前後関係が正しい、または逆転している」の確認をする。(3)「組み合わせ」の不適合。用語同士の組み合わせ、関連付けが間違っているケースの確認をする。この場合、関連のない用語が文章の中に含まれているので、それを見つける。
従来のセンター試験の過去問など正誤判定形式の問題を数多く解いていく際に、上記のやり方で「誤文」を探すようにトレーニングを積んでいけば、正誤文判定問題には強くなるはずである。

2 の史料問題では「永仁の徳政令」と分国法（「朝倉孝景条々」「今川仮名目録」「甲州法度之次第」「塵芥集」）の史料が出された。「永仁の徳政令」の史料問題では、史料中の「用語」の意味を問う問題が出された。一般的に、日本史の史料は読むのに古文の知識がある程度必要であるが、出典や史料中の人名などのキーワードをしっかり取捨し、選択肢も参考にして、何に関する史料かを類推し、解いていく。また、史料中の出来事の年代を選ぶ問題が出題された。すべての出来事の年代を覚えないといけないとなると受験生には大変な作業になるが、史料で出題された「重要法令が発布された年代」、「重要な出来事が起こった年代」（通例は教科書の太字、用語集の赤字）については、学習する際に必ずチェックしていってほしい。また分国法の史料問題で出題された史料は、いずれも頻出史料であるので、教科書に掲載された史料や『詳説日本史史料集』などを普段から活用して、太字になっている部分については確認して、空所補充問題や下線部問題に対応できるようにしてほしい。

3の(B)では江戸時代の享保の改革についての問題が出題された。江戸幕府の三大改革及び田沼の政治で行なわれた政策の分類はノートにまとめるなどして、確実に対応できるようにしておきたい。

4では「大正から戦後の大衆文化」のテーマで近代ジャーナリズムの発展や文学・思想などが問われた。ラジオ放送の開始（1925 年国営、1951 年民営）、テレビ放送の開始（1953 年国営、民営）時期は問われやすいのでしっかり整理してほしい。さらに、近代文学の「写実主義」などの文学思想の変遷や国家主義の発展に関しては、「明治最初の 10 年間」と「それ以降」に分けて、前者は欧米流、後者はその反動で日本流が台頭するという体系化（この体系化は近代文化を学習する上で必須）の作業をしてから、細かい知識をインプットしていくことを心がけて学習していってほしい。